

小地域福祉活動団体の継続要因と 個人的変化が及ぼす活動への影響

—活動メンバーに対するインタビュー調査を通して—

熊谷大輔^{*}

要旨：

近年、人口減少や高齢化の進行する地方では小地域福祉活動が活発化してきている。一方、それら活動には継続が困難となる場合も少なくない。これら小地域福祉活動における継続要因は、(1)柔軟な参加と活動の仕組み、(2)利他意識の醸成、(3)人との出会いとつながり、(4)地域への理解と愛着の生成、(5)活動に対する誇りと自信、の5つの論点にまとめることができる。本論文では、福祉をめぐる「場づくり」を目指すF団体に所属するメンバー6名に実施したインタビュー調査をもとに、活動の継続要因や望ましい活動のあり方について、5つの論点との関連性と活動メンバー個人に生じる変化を踏まえて検証した。

そのうち、(1)「柔軟な参加と活動の仕組み」は活動の「条件」に当たるものであり、(2)以降の4つの論点は活動の「成果」に当たるものであり、「成果」の実感と活動「条件」の整備との間には困難な調整が求められることが示唆された。さらに、これら「成果」と「条件」は「一般化」と「特殊なものとの融合」という2つの志向が影響していると考えられ、活動主体のずれは多様な人びとが活動に参加することによる多様性が増せば増すほど活動主体は個々に異なる方向に純化させようとする考え方を生成しやすいことが示唆された。

以上を踏まえると次のように結論づけられる。(1)活動メンバーは「活動の仕組み」以上に「人との出会いやつながり」を重視する傾向がある。(2)したがって、小地域福祉活動の継続には、「共同・実践ありき」と呼ぶべき「活動姿勢」の実現が重要な鍵を握る。(3)さらに言えば、「柔軟な参加態度と活動の仕組み」という最低限の「条件」と活動の多様な「成果」との調整が不可欠である。

キーワード：小地域福祉活動、組織の柔軟性、共同実践、成果の多様性

Continuation of activities and personal changes of members in the small local welfare group: Through interview surveys with members

Daisuke KUMAGAI

Abstract：

In recent years, small local welfare activities have increased in depopulation and aging regions. However, most of those activities cannot be continued. Through my short bibliographic survey, I conclude the primary factors of continuation of those activities as follows: 1) organization for flexible participation of members and decision of activities, 2) fostering of altruistic awareness of members,

^{*} くまがいだいすけ 弘前大学大学院地域社会研究科地域文化研究講座
qqa824d9@bridge.ocn.ne.jp

3) encounters with the unknown and connections with members, 4) fostering of understanding of and attachment for local community, and 5) self-confidence and pride of the activities.

Therefore, in this paper I studied the interrelationship between these factors, paying attention to personal changes of members, through the interviews with six members of Group F which aims to change the negative image of welfare work in Akita City.

At first, I analyze that the first factor corresponds to the activities “conditions,” and the other four factors correspond to the “results.” Consequently, the members of group need to difficult coordination between the first conditional factor and the other resultant factors. In addition, I find out that in the conditional factor “respect for the peculiarity” is oriented and in the resultant factors “generalization” is valued. Accordingly, I guess the latent conflict between members has been occurred from this inconsistency of orientations.

Lastly, I conclude as follows: 1) the members of groups tend to make much more of the resultant factors, especially “encounters and connections”, than the conditional factor. 2) this “encounters and connections” factor can be called the activity principle for “cooperative practice”. 3) thought this principle the group could solve the conflict between organizational condition and resultant fulfillment of members.

Keywords: small local welfare activity, organizational flexibility, cooperative practice, resultant diversity

I はじめに

我が国では、国からの権限移譲と規制緩和が推進されるなか、少子高齢化で高まる福祉需要に供給が追いつかない構造的な問題を引き起こしている。しかも「地域包括ケアシステム」の認知度は国民の23.8%¹⁾に留まり、不特定多数の無・低関心層の取り込みを視野に入れた取り組みが必要である。しかし、「参加型福祉社会」の創造があらためて叫ばれるも、新たな福祉の担い手として期待されている住民の当事者意識の弱さの裏返しと言えよう。

これに対し、近年、人口減少や高齢化の進行する地方で活発化している活動に小地域福祉活動がある。これは地域に住む住民が主体者となり、地域で生じる課題解決を目的に行動する対象範囲の小規模な福祉的活動である。そのなかには、福祉の担い手の裾野を広げるべく、福祉のイメージ転換を図ろうとする活動も見られる。このうち筆者も参画して秋田県で行われているF団体の活動は、福祉従事者だけではなく福祉に興味・関心の低い市民も参加できるよう、美容をはじめ従来の福祉との関連が薄いと考えられていた領域と福祉とを組み合わせるイベントを重ねてきており、全国的に見ても希少な例である。

筆者は、そうしたイベントに参加する動機や参加後の意識の変化を熊谷 (2016)²⁾などで明らかにしてきた。その結果、参加者の福祉に対する元来のイメージが「利用する福祉」と「利用される福祉」との二極化しており、福祉の本質として、現在政策的に期待されている「相互扶助」よりも「利他」の面が意識された方が、福祉に対するイメージがよりポジティブに変換されやすいことなどが明らかになった。「参加型福祉社会」が目指される際、「相互扶助」の意識づけが先行しがちであるが、人々の福祉のイメージの現実的な転換を図るうえで、「福祉＝利他」という原点に立ち返ることが重要であるという点を再認識させる点でも、F団体における実践は貴重なものと言えよう。

これらの知見を踏まえ、本論文では、こうした活動そのものへの継続的な関わりの要因に接近したい。小地域福祉活動の活動が継続する条件については以下のように整理されている。まず、長岡市社

会福祉協議会の地区福祉会を対象とした青山³⁾(2012)は活動が継続する条件として、①活動における役割を固定しない、②些細な活動でも継続する、③学び・楽しみ取り組みの工夫、④自分の住む地域を知る取り組みの4つを挙げている。

これに対し、A県における住民主体のささえあい活動団体に所属する6名を対象とした大西ら⁴⁾(2014)は、①地域に対する愛着の気持ち、②脈々とつながる人脈、③ひとに対する慈しみの心、④仲間との出会いと結びつき、⑤活動に対する誇りと自信、⑥自然体でいられることの心地よさ、⑦自分らしさが保てる生活のバランス、⑧活動を実現させる骨組みの8つを指摘する。総じて大西らが挙げる論点は活動の内容や組織方法だけでなく、その結果として担い手にどのような意識の変化が生まれているのかという点に注目したものとなっている。さらに言えば、熊谷(2016)が見出した「相互扶助」だけではなく、「利他」という意識づけの重要性に注意を払っている点で注目される。

これらの青山、大西らの論点は以下のようにまとめることができよう。

- (1) 柔軟な参加と活動の仕組み：青山①③、大西ら⑥⑦⑧
- (2) 利他意識の醸成：大西ら③
- (3) 人との出会いとつながり：大西ら②④
- (4) 地域への理解と愛着の生成：青山④、大西ら①
- (5) 活動に対する誇りと自信：青山②、大西ら⑤

ただしこれらの論点においては、活動を継続するにしたがって生じると考えられる活動メンバーの変化が十分に考慮されていないと考えられる。そこで本研究では、活動の継続要因や望ましい活動のあり方について、活動メンバー個人に生じる変化を踏まえたうえでこれら複数の論点どうしの関連について検証したい。

II 調査概要

1 調査対象

対象者はFukushi Innovation From Akita(以下、F団体)に所属するメンバー13名のうち、承諾が得られた6名に協力を依頼した。

F団体は2012年(平成24)12月に秋田県秋田市をその活動範囲の中心とし、これまでに、福祉分野と他分野(異分野)との融合イベントを開催し、多様なコミュニティ形成を図ることにより、世間一般に蔓延する福祉のネガティブイメージに対する払拭を目的の一つに掲げている。その手法には、一般的に福祉とはつながりの薄いと思われる対極・対照的なイメージがある分野と福祉を融合させたイベントの開催により、主として福祉への無低関心層へのアプローチを試みている先駆的な団体である。

なお、この事例は筆者自身が企画・立案・実施・検証に一貫してかかわる当事者グループの活動であり、今後の実践にフィードバックしてゆく途が開かれている。

表1 インタビュー対象者の属性

	性別	年齢	職業	活動歴	加入方法	役職
A氏	男性	30代	福祉従事者 (介護職員)	2年2ヶ月	他者	あり
B氏	女性	30代	福祉従事者 (施設管理者)	1年5ヶ月	自己	あり
C氏	男性	40代	福祉従事者 (生活相談員)	2年0ヶ月	自己	なし
D氏	男性	30代	福祉従事者 (介護職員)	1年0ヶ月	他者	あり
E氏	女性	30代	福祉従事者 (介護職員)	3年5ヶ月	自己	なし
F氏	男性	40代	福祉従事者 (作業療法士)	2年0ヶ月	自己	なし

2 調査方法

調査は2015年8月から9月にかけて、秋田県秋田市で行い、研究協力者を1回目、2回目とも各3名の2グループに分け、半構造化グループインタビュー形式をとった。

計6名の対象者には調査日程の希望により、第1グループをA氏、B氏、C氏、第2グループをD氏、E氏、F氏と決定した。実施にあたっては、インタビューガイドを作成し、対象者には、①F団体に加入し、活動を継続してきた理由、②F団体が実施するイベントの準備・開催・反省を通して生まれた自己変化、③F団体の変化と今後の目指す方向性について、自由に語ってもらった。1回目は1時間43分、2回目は1時間29分であり、対象者の承諾を得てICレコーダーに録音した。

Ⅲ F団体と調査対象者の運営関与プロセスの概要

F団体の活動時期及び調査対象者が運営に関与したプロセスは図1の通りである。

ここでは、F団体の活動を第1期(2012年12月～2013年11月)、第2期(2013年12月～2014年11月)、第3期(2014年12月～2015年11月)に分け、調査対象者の運営関与を回数にて表記している。

第1期では、メンバーの誘いによりA氏が加入し、E氏は自ら加入している。その約2か月後には、C氏とF氏も自ら加入している。2013年11月に開催されたイベントではC氏とE氏は「ファッションショーのモデル探し」を行うなど中心的に関与する一方で、F氏は参加者への呼びかけなど広報面に関与していた。

第2期にあたる2014年7月に開催されたイベントでは、A氏がプロジェクトのリーダーを務め、イベントの企画、立案、実施に積極的に関わり始めた。さらに2014年12月に開催されたイベントでも、A氏は多くの人々にF団体の説明及びイベントの概要を伝える役目を担い、外部と接触する機会も多くなった。また、第2期ではB氏やD氏が自ら加入し、B氏は加入後、間もなく、F団体が実施するプロジェクトのサブリーダーを務め、以降、A氏とともにプロジェクトの中心的役割を担った。この時期は、イベント回数が増加するだけでなく活動範囲も拡大し、運営に関与するメンバーに変化が見られた。すなわち、事業に全員が関与するかたちから、役割分担が自然発生していったのである。

第3期では、第2期と比較すると、イベント回数が減少し、各々が関与する機会も減少したが、2015年12月に開催されたイベントにはA氏、B氏、D氏、E氏、F氏が関与し、なかでも、A氏はプロジェクトのリーダー、B氏はプロジェクトのサブメンバーとして運営に積極的に関与していた。さらに、D氏は加入期間が浅いにも関わらず、役割を自ら申し出るなど運営に積極的に関与しようとした。一方でE氏とF氏には、特別固定された役割がなく、A氏、B氏、D氏に比べると関与する度合

いが薄い。

多くの期間を通して、F団体の運営の中心的リーダー格であったのはA氏とB氏であり、開催する個々のイベントで中心的な役割を担ったのはC氏、D氏であった。一方で、E氏とF氏はサポート的役割を果たし、活動メンバーのそれぞれに役割が生まれた。

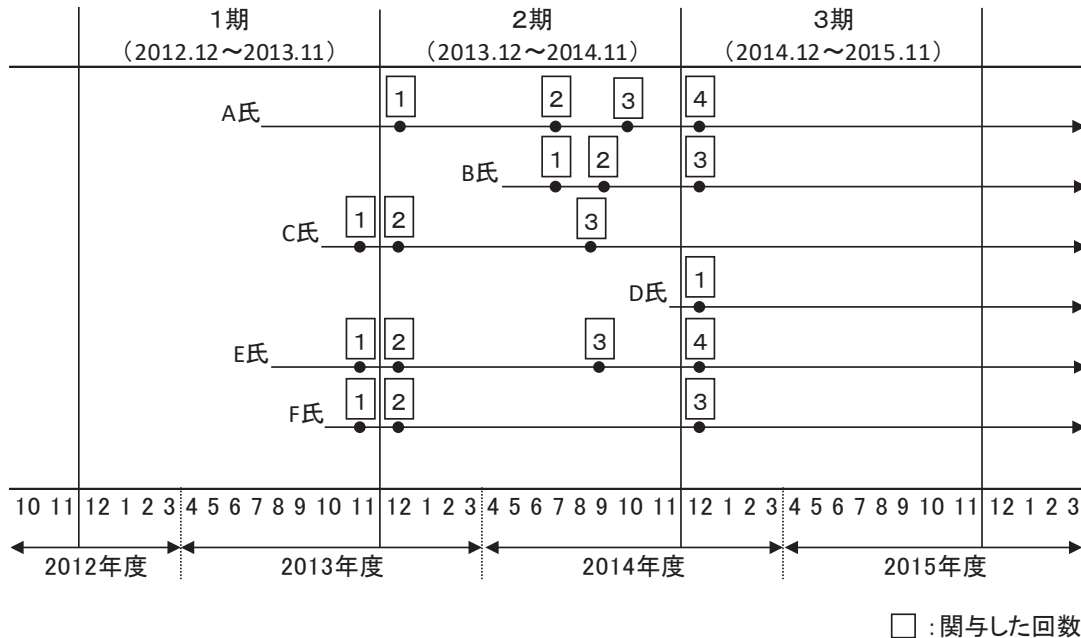


図1 F団体と調査対象の運営関与プロセスの概要

IV 結果

まず、F団体に所属し、活動を継続してきた理由について、それぞれの語りを整理する。

1 活動メンバーが語る活動継続の要因

A氏は以下のように語っていた。

自分には担当する事業があるので、継続していきたいという想いがあります。団体に入った頃は特に深くも考えていなかったのですが、活動をしていく中で、その面白さや楽しさが大きくなりました。具体的には、仲間といかに福祉のことを福祉従事者以外の人に知ってもらうかを考えて、イベントを通して参加者の反応が見えて、参加した方とのつながりが出来ることに喜びを感じました。

そして自分が担当する事業に参加してくれた方から「また参加したい、今後はいつやるの」という声ももらって、そういう周りの人達からの声を聞いて、その声に応えていきたい。福祉とか、そういう枠組みではなく、様々な人と交流するための場を今後も創り続けていきたいです。

A氏は事業を展開することに「面白さ」や「楽しさ」を感じ、それが継続要因だと語っている。A氏はこれまで、高齢者福祉施設で一貫して職務に没頭していた。そこでは、第三者から「期待」される機会が少ないことを日頃、A氏と関わる中で筆者は耳にしていた。つまり、A氏が語る「楽しさ」は活動の同業仲間以上に一般参加者、すなわち「第三者からの期待」に応える「楽しさ」であり、これまでの福祉の職場で得られることのなかった第三者からの期待を実感すると同時に、その期待に応

えられている自分を実感しているからであろう。

これに対してB氏は以下のように語っている。

活動を継続してきた理由は、いつもの日常の仕事のスタイルとかけ離れた場面で活動してみたかったからです。

さらに活動をしてみて、色々な人と知り合うことが出来て、人との繋がりを作ることが目標というか、今は目的となっている感覚があります。私が入った時期は転職をしたばかりの頃で、その中で、前の職場では得ることの出来なかった色々な人との交流や出会いをして、視野を広く持ちたかった。それは今も継続している理由です。

でも、私は継続していくなかで、あるとき、この団体の趣旨がよく分からなくなり、何の為に活動をしているのだろうという感情が湧き上がって、活動に意味を見失っていた時期がありました。でも、ここで活動していきたいという自分もいて葛藤した時期がありました。そんなとき、メンバーの存在は大きかったですね。

B氏は活動を継続している要因を (1) 職場とは異なる非日常的な経験、(2) 活動を通じた人脈形成の2つだと明言している。B氏は介護職員から管理者へ転職した直後にF団体に加入した。以前の福祉の職場での働き方とかけ離れた行動を希望し、自分の「視野」を広げたいと切望していた。その際、B氏にとっては「メンバーの存在」が大きかったと語られている。したがって、B氏が語る「人」とは活動する「同業仲間」であり、A氏の語る「第三者」とは異なると言えよう。さらに、そうした「同業仲間」はB氏の福祉の職場とは異なる人間関係だと考えられ、B氏における活動の継続には「同業仲間」が鍵を握っていると言えよう。

C氏の語りは以下のようなものである。

僕は個人的にイベント等の開催を行ってきましたが、仕事と自主的な活動がうまくクロス⁵⁾してなかったように思います。それが、F団体に入ったあと自分の仕事とプライベートの活動がクロスしてきたと思えてきました。

色々な人たちと知り合えたことがひとつ大きくあって、そこにいる仲間と一緒に自分の思いをもっともっと表現したいと思ったことが継続をしてきている理由になっています。もっと言えば、この活動がさらに充実して自分自身の思いとリンク⁶⁾するようであれば、より強く、今後でも継続していきたいと考えています。

C氏の語る継続要因は、まずF団体以前の活動では得られなかった (1) 仕事とプライベートの両立感である。さらに、(2)「同業仲間」の存在が大きいと語られている。C氏はF団体に加入する以前から個人でイベントの開催をしていたが、他者と協働する機会は少なかったという。それが自己の表現を妨げる要因であることも理解していた。B氏と同様C氏もまた「同業仲間」が継続する要因であろう。

D氏は関わりが浅いながら以下のように語っていた。

団体が主催するイベントに参加したことが団体に入るきっかけでした。さらに、自分の職場の人も既に団体のメンバーで、その人から一緒にやらないかと誘いを受けました。当時は仕事以外の活動の場を探している最中で、やってみようと思いました。

団体に所属して思ったことですが、メンバーの皆さんは基本的に「それは無理だよ」というよりは「とりあえず、やってみよう」というタイプの方々がそろっているなあと。この雰囲気の中に自分の身を置いたら、自分をもっと高めていけるような気持ちが出てきました。自分を高めることが出来ると思える皆さんといるからこそ、活動を継続しているんだと思います。

D氏の継続の要因もまた、「同業仲間」の存在である。D氏は以前、岩手県で音楽イベントを開催していた。その後、秋田県に戻り、社会福祉協議会で仕事を始め、生活と仕事の安定をまずは求めたという。結果としてもたらされた「安定」は、D氏が求めたものであったにせよ、イベントを開催していたころの前向きさがいつしか失われたと振り返る。ここで、D氏が語る「同業仲間」とは、物事にポジティブな考え方をもち、その考え方に触れることで自らも成長することができると感じるような関係なのであろう。

これに対して活動期間が最も長いE氏は、以下のように語っている。

私が団体に所属したきっかけは自分自身が変わりたかったという気持ちです。私は子供がいて、生活の中心は「子育て」と「仕事」と、あと、今、社会福祉の勉強を続けているのですが、そんな生活の中で人と関わる機会が、すごく少なくて、やっぱり、段々、こう、子育てがメインとなっていくじゃないですか。そうすると、社会から取り残されているという疎外感を感じる機会がすごく多くて、「ああ、なんか、このままじゃいけない、自分の為にも、子供の為にも、面白くない人間になっていく」気がして、人任せですが、自分が変わるきっかけになるのではと思っています。

継続している理由は自分が変わりたいという想いがあるからです。色んなイベントを行う中で、色んな方と出会って、色んな方の考えに触れて、参加者の皆さんと交流を深めていくうちに自分がどうありたいかということまで、考えるきっかけをもらっています。

E氏は、「子育て」と「仕事」、さらに通信制大学で社会福祉に関する「勉強」に励んでいたが、それらに埋没し「社会からの疎外感」を覚えていた。それを乗り越えるためにF団体に加入したという。さらに活動を継続しているのも「自分が変わりたい」ためであり、そこで語られる「変りたい自分」とは「子育て」と「仕事」に埋没する自分であり、「社会から取り残されている自分」だと考えられよう。その際、そうした「自分」のあり方や位置を確かめるきっかけになっているのが、やはり「色んな人との出会い」だと語られている。E氏が語る「色んな人」とは、「参加者との交流」とは特に区別して言及されていることから、B、C、D氏のような協働実践を行う「同業仲間」であると言える。最後にF氏は以下のように語っていた。

私は福島にいて、震災をきっかけに秋田に戻ってきました。すると「秋田ってなんか元気がないな」と感じました。それで秋田がもっと元気になるためには、何かしないといけないと漠然と考えていて、初めは自分で起業をしたいと思ったんです。それで何が必要かを考えたときに、やはり「人脈」だと考えて、その人脈作りを行おうとしたときにF団体と出会いました。私もこの団体と一緒に活動すれば、もしかしたら、秋田も元気になり、自分も起業という夢を果たせるのではないかと勝手に思っていました。

活動を継続する理由は、やっぱり、人脈というか、人と繋がるという目的があります。秋田の人同士がつながることの大切さを自分も少なからず知っているというか、もっと色々な方々と繋がりたいと思うので、今も活動を継続しています。

F氏は、地元に対する危機感を自らの起業によって打開しようとし、そのために「人脈」形成を図ろうとF団体に加入した。さらに、活動を継続する要因としても、「人と繋がる」ことを掲げている。F氏は主に広報面で関わってきたことや「色々な人と繋がりたい」と人脈の量的な拡大を志向するような語りから、F氏が活動を継続する要因はA氏やE氏のように「参加者」と捉えてもよいだろう。

以上、活動を継続してきた理由に関する語りの要点を整理すると表2のようになる。

表2 活動参加の継続要因

対象者	継続要因	語りの要点
A氏	参加者からの期待	活動の「面白さ」「楽しさ」 第三者からの期待
B氏	同業仲間の存在 (による福祉の職場とは異なる経験)	福祉の職場とは異なる非日常的体験 活動を通じた人脈形成 同業仲間による葛藤の払拭
C氏	同業仲間の存在 (によるワークライフバランス)	仕事とプライベートとの両立感 同業仲間との活動
D氏	(ポジティブ志向の) 同業仲間の存在 (による自己成長への期待)	福祉の職場とは異なる関係性 ポジティブ志向の同業仲間 自己成長への期待
E氏	(疎外感を克服する) 同業仲間との出会い	社会からの疎外感の乗り越え
F氏	(地域活性化や起業に生きる) 参加者との出会い	自らの起業による地域活性化 起業にも生きる人脈形成

ここで青山＝大西らの論点と比較してみると、活動主体の語りの中核には、青山＝大西らの言う「人との出会いとつながり」があることがわかる。したがって、活動継続の要因を探るうえでは、活動の仕組みや活動そのものの成果以上に、まずもって「人との出会いとつながり」を可能にする機会や場が作られている重要性が示唆されていると言えよう。

さらに、ここで言う「出会いとつながり」の対象には、大西らも区別していたように「同業仲間」と「参加者」がともに含まれている。このうち「同業仲間」としては、日常の「職場」や「仕事」の関係とは異なる点が重視されるとともに、ポジティブ志向を持つ存在であることが特に触れられている。このことは熊谷（2016）でも指摘したように、現在の福祉の現場に広がる疲労感や閉塞感の裏返しであるとも言え、小地域福祉活動を展開するうえで欠かせない視点であると考えられる。

同時に注意されるべきは、同じ「出会いとつながり」を掲げながら、「同業仲間」との「出会いとつながり」を重視する主体と「参加者」とのそれを重視する主体が同じ団体内に共存している点である。この点が青山＝大西らが指摘する「柔軟な参加と活動の仕組み」によって確保されるものだと考えることもできよう。このような仕組みについてF団体では、活動が広がるにつれて従来はなかった役割分担が自然発生してきており、逆に役割が固定化して柔軟性が失われる危険性が懸念される。

2 活動を通して生まれた変化と要因

次に、活動するメンバーのそれぞれが、イベントの準備・開催・反省を通して、自分の中に生まれた変化をどのように捉えているのかを検討する。

まず、A氏は以下のように語っている。

今までは言われたらやるというか、自分からはあまり動かず、周りの人がやるだろうという気持ちを持っていました。だけど、団体に所属し、活動をするようになってから、自分に任される部分も大きくなってきました。そうすると、自分で動いて、計画していくところが多くなって、なんとなく行動力がついたというか、そこが変化した部分だと思います。

これまでは思ってもなかなか動かないところがあったんですが、まずは動くようになりました。ときには、反対されることもありますが、まずは動いてみようかという気持ちがあって、今まで自分が責任あるポジションに就くというのはなかったんです、だから、役割があって、責任があって、という状況にあることが大きいと思います。

A氏は団体での活動を通して行動力が身についたと語っている。その要因としてまず、団体に入ること福祉の職場では得られなかった「役割の獲得」が挙げられよう。筆者はともに活動するなかでA氏から「周りの人がやるだろう」という言葉を何度となく耳にした。そのように他者に任せることが多かったA氏にとって、団体での役割の獲得はこれまで体験したことのない責任と重圧が存在していたことであろう。さらに、A氏は「反対されることもあるが、まずは動いてみる」と自らの「実践ありきの行動力」について語っている。したがって、A氏における「行動力」は、単に役割に付随する能力として団体から与えられたものである以上に、A氏自身が周囲の反対を乗り越えて自ら役割を獲得するうえで欠かせない能力だったと言えよう。

これに対しB氏は以下のように語っていた。

仕事をしながら、イベントを進めていくのは、正直、すごく労力が必要で、精神的にも擦り減る感じです。でも達成したときの満足感、この満足感があるからこそ、何事にも前向きになれるという気持ちになって、昔から一人で突っ走っていくタイプですけど、皆さんと関わって、一緒に物事を創り出すという楽しみを教えてもらった感じがします。それが変化ですかね。今まで仕事一辺倒で自分の気持ちを職場以外の場所で発信することがなかったんです。ここに所属して、自分の考えを伝えて、企画して、行動して、実行することができて、なんか場所が出来たんだって感じます。

仕事では立場上、スタッフに任せて、結果を見る立場なんです。だから自分が話して、企画して、実行した後の満足感を感じる事が出来たんだと思います。個人的には、今が充実しているんだって思っています。」

B氏もまた、団体での活動と福祉の職場での仕事とを対比させながら、自らの変化について語っている。すなわち、語りの順にしたがえば、第1に「単独行動から共同実践へ」、第2に「仕事一辺倒からもう1つの場所の確保へ」、第3に「監督者から実践者へ」の変化である。B氏は従事する福祉の職場において、「監督者」という「実践者」とは異なる水準の立場にあり、その立場は「昔から一人で突っ走っていく」性格に対して影響を与えなかった。それがF団体で同業仲間と活動を重ねるなかで、「実践者」、しかも「共同実践者」という新たな立場を得ることにより、「共同実践」の楽しみを実感したのである。そうした楽しみは、F団体をもう1つの「場所」としてB氏に実感させるうえで欠かせない要素となっている。さらに、そのように「満足感」を得られるもう1つの「場所」があるからこそ、仕事に対しても前向きになれるという好循環が生まれているというのである。

さらにC氏は団体の活動を通して生まれた変化を以下のように語った。

以前、障害を持っている女の子がおしゃれな洋服を着て、参加者の前に出たことがありましたよね。日常生活とは違う、別のステージが用意された時の彼女の喜びを見たとき、そのステージを用意できたことがすごく嬉しくて、とても印象に残っています。所属して、初心というか、原点に立ち返るといふか、そんな想いを持てたことが変化です。活動を通して、改めて「皆一緒なんだ」という思いになって、なんか、それを確認させもらっている感じです。

なんか、当たり前のことを当たり前に行うことの難しさってあって、活動を通して「普通のことを普通に実現しているんだ」という想いと、今まで、なんとなく経験を積み積むほど、頭でっかちになっていくような感じがあったんですが、初心に戻る機会を得たといふか、大事なことに気づかせてもらいました。

C氏が語る自らの変化は「福祉の原点」「福祉従事者としての初心」への回帰である。きっかけとなったのは、F団体が主催しC氏も関わった障害を持つ人びとによるファッションショーであった。

そこで、健常者とは区別がつけられている「日常生活とは違うステージ」を準備し、そのことに応えるかのように障害を持つある女の子にとびきりの笑顔が見られた。その笑顔から得られたC氏の原点・初心回帰が「皆一緒なんだ」という感覚である。概念化してしまうと、C氏の実感の襞を損なうかも知れないが、ひとまずは「ノーマライゼーション」への回帰と呼んでおきたい。

この原点・初心回帰が語られる際に重要なのが「経験を積み積むほど頭でっかちになっていく」という語りである。すなわち、「皆一緒なんだ」という原点・初心は、福祉の仕事を重ねれば重ねるほど、見失われがちなのだとC氏には感じられていると言えよう。その意味では、C氏の原点・初心回帰も、A、B氏と同様、日常従事している「福祉の職場」との対比をベースにしてなされていると言えよう。

一方、D氏はどのように語っているのでしょうか。

私は所属して、まだ1年弱ですので、そんなに多くの活動はしていませんが、メンバーと一緒にやってみようと思えるようになったことが変化ですかね。今まで自分がやってきたことを経験として活かしたいと考えるようになりました。今では、F団体以外に色々な活動にも参加しています。

前は、あまり積極的に行動しようという気持ちになれなかったんですが、やってみようという意識の変化というか、自分の中では成長したなど実感しているんです。もともとやりたいと考えていたはずの自分の気持ちが知らないうちにやらないという風になっていたんだと活動する中で気づきました。

D氏が抱く大きな変化も、「思ったらやってみようと思えるようになった」と語られているように、A氏と同様、「実践ありきの行動力」だと言えよう。そうした「行動力」がうまく発揮できない現場がどこであるのかは、ここでの語りからは、はっきりと読み取れないが、先に挙げた継続要因をめぐる語りです。「仕事以外での活動の場を探して」F団体に入ったと語られていたことと照らし合わせると、「行動力」が発揮できない現場は、やはりA氏と同じように「福祉の職場」だったと考えることもできよう。

さらに、D氏の場合、継続要因をめぐる語りにおいて、物事にポジティブな考え方を持つ「同業仲間」の存在が言及されていることから、福祉の職場ではなくF団体で得られる固有の経験として、そうした「同業仲間」と時間と場所を共有できることを挙げることができよう。そのうえでD氏は、「同業仲間」と同様のポジティブさ、行動力を得つつあることを、自らの「成長」として実感していることから、D氏もまた、そうした「同業仲間」の1人になりえていると実感されていると考えられる。活動期間が最も長いE氏の語りは以下の通りである。

私は消極的な人間なので、変わりたいという気持ちがあってもF団体と出会う前はなかなか行動することができなかったんです。こうやって、団体の皆さんと一緒に物事を進めていくうちに事業が終了したときの達成感みたいなものが自分の中に生まれて、以前よりも物事に対して積極的になれたように感じます。

やっぱり、今、改めて、振り返ってみると、楽しいという一言なんです。やっぱり、自分の普段の生活という「枠」から抜け出して、一生懸命に何かに打ち込むことって楽しいです。いや、勿論、一生懸命に仕事もしているし、家のこともやっていますけれど、それだけでは満たされない部分を満たしてくれるというか、やっぱり、仲間の存在に気づくことができたんですね。

E氏は事業をメンバーと共に活動するなかで達成感が生まれ、消極的な人間から積極的な人間に変化したと言う。この変化の要因は「同業仲間」と共に成し遂げる「楽しさ」であり、それは同時に生

活で満たされなかった部分だったと言えよう。だからこそ、「子育て」という家庭生活についても対比的に言及されているのである。

最後に、F氏は以下のように語っていた。

私は反省しきりというか、人とつながりたいという目的で入ったんですが、他の皆さんに準備など、任せきりになっている部分が多くあるなあと思います。そして、自分がしっかりと動けていないなと思っています。

自分から何かを発信することがうまく出来なくて、それが自分に影響を与えているように感じています。具体的には、物事をネガティブに考えてしまう自分に少しずつ変化してきたかもしません。それでも秋田の福祉を少しずつ、理解することが出来て、多くの方々と接する中で、色々な知識を吸収できたんですが、今は秋田で起業をすることの難しさを感じます。今は少し自分を抑え込んでしまっているように感じていて、うまく前に出ることが出来ていないなあ、自分のなかで少しネガティブな感情が今は大きいかもしれないです。

F氏の場合、「物事をネガティブに考えてしまう自分」への変化や「自分を抑え込んでいる」、総じて「ネガティブな感情」が大きくなっている。これは根本的には、F氏の参加動機が秋田という地域の活性化や起業だからだと考えられる。A、B、C、D、E氏は、それぞれ文脈は異なるにせよ、職場や家庭生活といった福祉の現場の閉塞感と対比した、F団体における共同実践の充実感が得られていた。これに対して、F氏において対比されるのは、秋田という地域をめぐる閉塞感であり、類似しているとしても福祉の現場をめぐるそれとは質が異なっていると考えられる。だからこそ、F氏はF団体での共同実践にうまく没入することができず、負の感情を蓄積させていっているのだと言えよう。

表3 イベントの準備・開催・反省を通して、自分の中に生まれた変化

	生まれた変化	変化の要因
A氏	(福祉の職場とは異なる) 行動力と役割取得	福祉の職場とは異なる団体での役割所得 役割と責任に応える行動力
B氏	(福祉の職場とは異なる) 共同実践の楽しみ (福祉の職場とは異なる) 場所があることによる仕事に対する好循環	団体での満足感が仕事にも好影響 単独ではなく共同で創り出す楽しみ 福祉の職場とは異なる意志や感情の発露の場の獲得 監督者から実践者への変化
C氏	(経験を積むほどに忘れていた) 福祉の原点、福祉従事者としての初心への 回帰	ノーマライゼーションという福祉の原点への回帰
D氏	潜在的な行動力の発揮	同業仲間との共同を通じて得られた行動力
E氏	(子育てと仕事とは異なる) 共同実践の達成感と積極性の獲得	同業仲間と共同する達成感 共同の達成感から生まれた一般的な積極性
F氏	起業という目的の喪失	任せきり、ネガティブな発想 福祉への理解の深まりと起業の困難さの自覚

以上、活動するなかでの自らの変化についてまとめれば、表3のようなになる。ここでまず注目されるのが、現在の活動もしくは自分と対比して語られるのが、たんにそれぞれの個人というだけでなく、職場や家庭、あるいは地域といった関係性の場だという点である。なかでも今回のインフォーマントのほとんど(A、B、C、D、E氏)が言及していたのが、福祉の職場についてであった。この事実は、熊谷(2016)でも検討したように、このF団体の一貫した活動目的が、仕事としての福祉の現場につきまとうネガティブなイメージをどのように転換させるか、という点にあったことを踏まえると、重要な知見である。

というのもまずF団体では、前述のように、障害をもつ人びとのファッションショーを実施するなど、美容や服飾など社会的にポジティブなイメージを持ち、かつこれまでは福祉と無縁に感じられていた領域と福祉とを融合させることで、福祉のイメージ転換を図ろうとしていた。たしかにそのような戦略にも、今回のC氏のように、それによって「福祉の原点」や「福祉従事者としての初心」を自覚させる効果があった。しかし、そうした活動の内容だけでなく、「共同・実践ありきの活動の進め方」自体も、福祉の職場とは異なる充実感を活動メンバーに与え、しかもB氏が明確に述べているように、福祉従事者である活動主体が抱く福祉イメージを転換させ、日常従事する仕事にも好影響を及ぼしているといえるのである。ここでいう「共同・実践ありき」とは、まずA氏やC氏、D氏が強調するような「実践ありき」という点とB氏やE氏が特に注意するようにその実践が同業仲間との「共同」である点とともに満たす活動の進め方のことを指す。

その際、青山や大西らにしたがった「柔軟な参加と活動の仕組み」ではなく、「共同・実践ありきの活動の進め方」と言い換えたのは、活動に取り組むメンバーの「姿勢」が重要だと考えられたからである。その「姿勢」とは、D氏が述べているように、活動をともにする同業仲間どうして触発しあうときに生まれる集団としての「姿勢」にほかならない。

ここであらためて注意すべきなのは、そうした「姿勢」をもつ集団が、各人にとって自分自身の性格を変えたり、もう1人の自分の居場所のように感じられたりすることが、現実の福祉の現場では生み出されにくくなっていることを示唆する点である。福祉の現場は、今日高度に制度化され組織化されており、B氏が言うように「実践者」としての関わりが難しかったり、A氏が暗に言及するように「役割」を実感しづらかったりすることも十分に考えられる。だからと言って、福祉の現場を根本的に変えることは現実的ではない。これに対してB氏のように、職場とは異なる意志や感情が発露できるもう1つの「場所」が確保されることで、職場の閉塞感が補償されるという効果も重要である。さらに重要なのは、C氏が語る「福祉の原点」や「福祉従事者としての初心」を想起させるという点であり、これはたんに福祉の現場の閉塞感を別な場で補償するという消極的なものにとどまらず、福祉の現場が抱える「福祉の原点や福祉従事者としての初心の喪失」に直接的に響くものだからである。

同時に注意すべきは、そうした「喪失」が「経験を積みば積むほど頭でっかちになっていく」現場のあり方から帰結しているというC氏の語りである。A氏の言うように「役割」を実感しづらかったり、B氏の言うように「監督者」という間接的な関わりしかできなかつたりする「組織上の地位」がもたらす問題ばかりでなく、福祉に対して専門的にまた職業的に関わっていくこと自体が、福祉の原点を見失わせるという指摘である。だとすると、たんに現在の福祉の職場についてその組織面での改善をするだけでは、福祉の原点を見失わせるという問題は十分に解決できないと言えよう。むしろ、そこで求められているのは、C氏が言うように「当たり前のことを当たり前に行う」ことであり、ここまでの文脈に引き付けて言えば、「共同・実践ありきの活動の進め方」にあるのではないだろうか。経験を積むごとに見えてくるタテマエやシガラミ、クレイゴトを超えて、まず福祉の原点に沿って同業仲間と「共同で」「実践する」ことこそ、「頭でっかちさ」に陥ることを避ける途ではないかと考えられるからである。

ここでC氏が指摘する「福祉の原点と福祉従事者としての初心への回帰」は、青山と大西らの言う「利他意識の醸成」と似ているように見える。C氏が「ノーマライゼーション」への気づきとして規定する「福祉の原点と福祉従事者としての初心」は、大西らの言う「人に対する慈しみの心」と内容的には異なるものの、「原点」「初心」としての位置づけでは類似している。ただし、大西らはそれを独立の事象として捉え、「人に対する慈しみの心」だけに照準した仕掛けの必要性を指摘しているのに対し、C氏の語りは別の読み方ができる。すなわち、「福祉の原点と福祉従事者としての初心」は、それだけを取り出した仕掛け—F団体の活動で言えば福祉と服飾を融合させるなど—のみに依存するというよりも、「共同・実践ありきの活動の進め方」という活動の「姿勢」からも引き出せるという論理である。

3 活動の変化と今後の展望

最後にインフォーマントそれぞれが感じる活動の変化と今後の展望に関する語りを整理していく。まずA氏は以下のように語っていた。

当初は友達同士という中で楽しくやっていて、そこに福祉や活動に興味がある人が入ってきたことで団体のカラーが変わるといえるのか、色んな意見を取り入れながら発展してきたと思いますね。それを考えると団体の変化としては開催内容の変化があるんじゃないでしょうか。最初は福祉従事者や福祉中心でしたが、活動するなかで、福祉に興味や関心が薄い人たちに福祉を理解してもらうきっかけを作っているんですよね。

今の団体は私にとって、一種のブランドみたいな感じです。団体がイベントを企画しているいろんな人と交流しながら活動することで、この活動を世間に言える自分があることが嬉しいし、誇りですね。活動することで、福祉に貢献しているといえるのか、そんな想いがあります。

A氏は団体の変化を「活動主体」と「活動内容」の変化と明言している。当初、友人関係で構成されたメンバーは時間の経過とともに、多様な人材が加入し、様々な意見を取り入れながら変化し、活動内容も福祉に興味や関心が薄い人たち向けに変わってきたという。こうした変化を経てA氏にとっては団体がある種の「ブランド」、すなわち自分自身の考え方や価値観を象徴するものになりつつある。それはそのように「世間」に自らの意図が伝わっているという実感があるからであろう。「ブランド」は周囲がそれを「ブランド」として認知して初めて意味をもつ。そのように「伝わっている手応え」をA氏が得ているからこそ、「福祉に対する貢献」という社会的な意義を見出しているのだと考えられる。

A氏とやや違った総括をするのがB氏である。

私が入ったときは、もう福祉と違う分野を掛け合わせて色んな人に福祉の魅力を伝えていたので、団体というよりはメンバーの気持ちの変化があるのかなあとと思います。なんか、メンバー全員が同じような視点を持っているわけではないというのか、前と比べると地域での認知度も上がってきていて、イベントを開催する目的がはっきりとしてきたんじゃないかなあとと思います。それが団体の変化ですかね。

前はメンバーが楽しく出来れば成功みたいなところがありましたけれど、今はそれだけではないというのか、地域や社会に訴える立場としての団体というのか、それがあっていいんじゃないでしょうか。

今後の団体の在り方ですか、なんか、介護に携わる人は、意外と皆さん、疲れ切っていて、時間にも追われて、実はプライベートでは気力も、目的も、場所も、そんなに多くないんじゃないですかね。これからは、私が入りたいと思ったように魅力ある団体にしていきたいです。そのためには、やっぱり、誰でも入ることが出来る団体であり続けたいと思います。

B氏の場合、「同じ主体の意識」の変化に注目している。つまり、「地域や社会」に対する訴求力を重視するようにメンバーの意識が変化しつつあるという。しかも、そのような意識をもつメンバーとそうでないメンバーとに分かれているのが実態だと述べている。さらに、意識の変化が生まれるきっかけとして「地域での認知度の向上」を指摘している。したがって、「地域や社会」に対する訴求力を重視する意識も、そのような意識が初めからあったというよりは、「地域や社会」から認知されていることをメンバーが自覚した時に初めて、個別的に生まれつつあるのだと言えよう。

C氏も以下のように語っている。

私が思うのは、本来の団体の趣旨が見えにくくなっているのではと思います。ここにいる皆さ

んはそれぞれ仕事を持っていて、空いた時間で活動していて、時間がなかったり、理由があると思うんですけど、団体が以前よりも認知されて、仲間が増えてきているなかで、メンバー同士の共有時間が少なくなったように感じています。

誰もが福祉を知るための一歩を踏み出しやすいように、ハードルを下げたという点に団体の強みがあって、それでいて、おしゃれとか、飲食店を活用するとか、ユニークなカラーを持っていることが団体の強みであるとは私思っていて、それをもっと擦り合わせて発展していければいいなあと思います。

C氏は「団体の趣旨が見えにくくなっている」と危惧している。それは、福祉従事者としての元々の忙しさに加え地域での認知度が高まり同業仲間も増えたことによる「時間の共有の減少」が原因だという。さらに、C氏によればF団体には「福祉へのハードルを下げる」すなわち「一般化」の強みと、服飾や飲食といった「ユニーク」なものと福祉を融合させるというある種の「特殊化」の強みとが、現状では十分に擦り合わされておらず、その矛盾した強みの調和に、C氏はF団体の可能性を見出すのである。

これに対してD氏が語るのは、職場と一線を画した「発信の場」としての重要性である。

私は、まだ団体の在り方とか、方針とか、経緯とか、把握できていないかもしれませんが、この活動は自分にとって、無くしたくない、継続していきたいという思いが非常に強くあるんです。これって仕事以外での活動ですよ。だからこそ、自分たちで発信できる部分があると思っています。これが仕事であれば、会社の方針や社内の考え方というものが必ず存在して、その大きな流れに個人の意見が反映されない場面も多々ありますが、ここは、ある程度、フリーな議論ができる場だと思っています。

ここだからこそ発信できるというのがあって、だから、団体としての発信力をもっともっと強めていきたいと思うんです。

E氏はB氏と類似した意見を述べつつ、メンバーどうしの意識の「多様性」を肯定的に捉えている。

そうですね、私が加入したときから考えると、皆さんが全く同じ方向を絶えず、見ていくというのは基本的には無理じゃないかなと思っています。私は各メンバーが少しバラバラになっているほうが刺激的だと思っていて、以前、イベントを開催したとき、それぞれが注目する視点に違いを感じたときがありました。その時々空気感みたいなものがあるって、やっぱり、それぞれが見ている方向は違うよね、と、でも、それで、自分自身が何か嫌だなと思うことはなかったし、面白いなと思えました。

メンバー同士では結構、意見をぶつける場面を多々、見てきましたけど、それぞれの意見をぶつけ合える関係性というのは大事だと思います。それぞれが違うこと自体は当たり前で、それを無理やり一致させる必要性って、無いんじゃないかなと思います。

今後、団体が目指す姿ですか、私は、あまり固く考えずに参加できる団体で、テーマに掲げる福祉と異分野の融合についての枠組みをもっと広げていきたいと思っています。

E氏が意識の「多様化」を肯定的に評価するのは、現実にはF団体ではそうした多様な意見が相互にぶつけられ合って「共同実践」が進められてきたという経験と、E氏自身が元来抱えている「多様性」を当然のこととする意識にもとづいたものだと言えよう。

最後にF氏は、団体の変化と展望について、以下のように語っていた。

団体の変化ですか、最初、参加したときは、全員がこれをやろうっていう形でしたがメンバーが増えるにつれて、ある種のグループ分けが行われて、その結果に立て続けで色々なイベントができたのかなと思っています。でも、集まるメンバー同士が同じ顔触れになってしまうことも多くて、個人同士のつながりが強調されすぎているんじゃないかなと感じています。

今後は企業とか、病院とか、もっと大きな単位と共に団体が行動を共にしないと自分たちのあり方や意見を発信しにくくなるのかなと思います。だからこそ、今まで以上に様々な機関や団体とつながって、企業や病院というより大きい単位との協働事業を行って、もっと大きな動きを作っていければと思います。

ここで語られているのは、Ⅲで触れたように、活動第2期から顕著となってきた「役割分担の顕在化」と、現実的には進んでいた「活動主体の固定化」「特定の人間関係への収斂」という問題である。これに対してF氏が展望するのは、大きな組織（企業・病院）との協働の必要性である。注意すべきは、F氏が団体の活動がそれほど地域や社会に発信されていないという実感を持っていることである。F氏が抱く実感は、活動の「同業仲間」になり得ておらずA氏らと手応えを共有しえないために生まれたとも考えられる。さらに言えば、F氏は「地域活性化」を志向しており、「福祉」という切り口から想定される「地域や社会」の広がりとは異なる「地域や社会」を念頭に置いているために、実感として共有しえないのだとも言えよう。

以上と表3にまとめた「個人の変化」を対照させると表4のようになる。

表4 活動の変化と今後の展望

	今後の展望	活動の変化	個人の変化
A氏	(存在価値としての) ブランド価値	活動主体・内容の広がり	(福祉の職場とは異なる) 行動力と役割取得
B氏	誰でも入れる原点への回帰	活動主体の意識の多様化 = 地域・社会への使命感 の顕在化	(福祉の職場とは異なる) 共同実践の楽しみ (福祉の職場とは異なる) 「場所」があることによる仕事に対する好循環
C氏	福祉の「一般化」と「特殊なものとの融合」との調和	主体の不透明化 主体どうしの時間の共有の減少	(経験を積むほどに忘れていた) 福祉の原点、福祉従事者としての初心への回帰
D氏	福祉の職場とは異なる「発信の場」		潜在的な行動力の発揮
E氏	異論を含めた自由な討議福祉と異分野の融合のさらなる展開	活動主体の意識のずれ	(子育てと仕事とは異なる) 共同実践の達成感と積極性の獲得
F氏	企業や病院等、より大きな組織との協働	役割分担化 人間関係の固定化	起業という目的の喪失

活動の変化はD氏を除いて実感されており、その内容もB氏とE氏が明確に語る「活動主体の意識のずれ」におおむね集約させることができよう。「主体」の広がり注目するA氏の場合も、そこで言われる「主体」はそれまでのメンバーとは異なる「意識」をもった人々のことであり、「役割分担化」と「人間関係の固定化」に注意を向けるF氏の場合も、それを通じて活動メンバーどうしの「意識」の共有が難しくなった点に主張の力点が置かれていると考えられるからである。

そのうえで、そうした「活動メンバーの意識のずれ」を肯定的に捉えるか(A、C、D、E氏)、否定的に捉えるか(B、F氏)によって、活動の展望は異なる。なかでも注目されるのは、そのような「ず

れ」が良い結果をもたらす条件を指摘しているC氏とE氏の発言である。すなわち、C氏の場合、福祉に対するハードルを下げるという「一般化」志向とそれぞれ異なる魅力をもった「特殊なものとの融合」を図ろうとする志向という一見すると矛盾した2つ志向をどう調和させるかという課題を掲げる。他方、E氏は意識の異なるメンバー同士の自由な議論が可能になることの重要性を指摘している。このうち後者は青山や大西らが挙げる論点のうち「柔軟な参加と活動の仕組み」の1つとして数えることができるものの、C氏の指摘はそれに回収しきれない。

あらためて考察してみると、青山と大西らが挙げた5つの論点のうち、第1の「柔軟な参加と活動の仕組み」は活動の「条件」に当たるものであり、第2以降の4つの論点は活動の「成果」に当たるものである。これに対してC氏の指摘する2つの志向のうち、「一般化」の志向とは「柔軟な参加と活動の仕組み」という「条件」を指している一方、「特殊なものとの融合」を図る志向とは、活動主体それぞれが手応えを感じるそれぞれの「成果」だと考えることができよう。青山と大西らは、それを「利他意識の醸成」「人との出会いとつながり」「地域への理解と愛着の生成」「活動に対する誇りと自信」と列挙したが、C氏の指摘が示唆するのは、そうした「成果」の実感と活動「条件」の整備とは予定調和的に直結せず、困難な調整が求められるということである。

さらに言えば、C氏が示唆する調整の困難さとは、たんに「条件」と「成果」の間だけでなく、C氏がまさに調整させるべきだとする「一般化」と「特殊なものとの融合」という2つの志向をもつことによって生まれる。すなわち、活動主体の意識のずれは、まさに「特殊なものとの融合」を通じた「一般化」によって、多様な意識をもつ人びとが活動に参加するようになったことで生まれており、そうした多様性が増せば増すほど、B氏とF氏のようにそれぞれ異なる方向に純化させようとする考え方を生み出すことになるからである。

V 考察

これまで小地域福祉活動の継続要因について青山や大西らが挙げていた5つの論点は、(a)活動主体の変化と(b)論点どうしの関連が十分に考慮されて来なかった。これに対して、活動主体の語りをもとにした本研究の含意をまとめると以下ようになる。

(1) 活動主体の視点に立つと「活動の仕組み」以上に「人との出会いやつながり」が重視される可能性がある。この知見は、筆者が調査対象に参与しているという当事者視点の研究であるがゆえに引き出された論点である。活動に没入している当事者がまずもって重視するのは目の前の人間関係であり、それを「仕組み」の形で抽象化し形式化するのは分析者特有の視線に従っているとも考えられよう。(2) 小地域福祉活動で重視されるべき点が、既存の福祉の現場（職業としての福祉／家庭内福祉）に見られる閉塞感とは異なる実感だとすると、「共同・実践ありき」と呼ぶべき「活動姿勢」の実現が重要な鍵を握る。さらにそれは、「活動の仕組み」によって確保されるものというよりも、青山や大西らの論点にある「活動に対する誇りと自信」によって生み出されるもの、すなわち活動を積み重ねたその手応えによってそれが間違っていなかったと再確認され再生産されるものだと考えられる。しかも、この「共同・実践ありきの活動姿勢」は、「福祉の原点や福祉従事者としての初心」を自覚させる効果をもつ意味でも重要である。(3)「柔軟な参加態度と活動の仕組み」は小地域福祉活動の最低限の「条件」であるが、その「条件」と活動の多様な「成果」とは必ずしも一致せず、また、「効果」が多様に分岐すればするほど1つの活動として統合することが難しくなる。「柔軟な参加と活動の仕組み」に、本研究が着眼した「共同・実践ありきの活動姿勢」が加わると、少なくとも「福祉の原点や福祉従事者としての初心への回帰」だけでなく「人との出会いとつながり」といった「成果」を生むのに必要な要因を明確化することができよう。

小地域福祉活動の主体を、既存の福祉従事者や家庭内扶助者の枠組みから広げるためには、活動の「成果」すなわち、活動主体の視点に立てば活動の「手応え」ができるだけ多様に広がるようにしておくことはたしかに重要である。そのうえで、そのように間口を広げれば広げておくほど、活動としての統一性は保ちにくくなる点に留意する必要がある。

地域社会という視点に立てば、特定の団体の存続ではなく活動がさまざまな場に広がるのが不可欠である。ある団体が存続できなくなったことで、活動そのものの意義が否定的に捉えられないように、如何に小地域福祉活動が「活動」として展開しうるのかを、今後検討してゆく必要がある。

その点を考える糸口は本研究にも内在している。すなわちF団体には福祉の現場を志向するメンバーだけでなく、F氏のように「地域活性化」を明示的に志向するメンバーがいた。そうしたメンバーや志向が排除されることがなければ、小地域福祉活動には、個々の福祉の現場と地域社会とを接続させる媒介的・中間的な機能を期待することができよう。

さらに、現代の地域社会に求められている「参加型福祉社会」の創造を実現しようとするならば、小地域福祉活動だけではなく、地域包括ケアシステムといった地域福祉を取り巻く広範な状況との関連を明らかにしてゆくことが残されている。それは、小地域福祉活動を実践している組織ごとのネットワーク形成過程の在り方、あるいは仕組みの提示である。たとえば、本研究で明らかにした、「共同・実践ありきの活動姿勢」が個々の小地域福祉活動だけでなく、活動間のネットワークにおいても有意義であるかどうかなど、検討されるべき論点が残されている。

謝辞

本調査を行うに当たり、研究にご協力頂きました皆様に心からお礼を申し上げます。

註

- 1) 平成26年度老人保健事業推進費補助金 老人保健健康増進等事業, 「介護予防や地域包括ケアの推進に対する国民の意識調査研究事業」, 公益社団法人日本理学療法士協会, 2015.
- 2) 熊谷大輔: 「福祉のイメージ転換と主体性の醸成におけるメカニズムについて — 「福祉」と「美容」融合イベント参加者に対する追跡調査を通しての検討—, 弘前大学大学院地域社会研究科年報, 12, 3-14, 2016.
- 3) 青山良子: 「小地域福祉活動の継続要因についての検討」, 敬和学園大学研究紀要, 21, 31-42, 2012.
- 4) 大西昭子・池田恵美子・高橋裕子・黒岩郁子・今村優子・松村晶子・山岡享子: 「住民主体のささえあい活動の継続を可能にする要因の研究」, 高知学園短期大学紀要, 44, 9-21, 2014.
- 5) ここでいう、「クロスする」とは、仕事と活動の共通項を意味し、活動することで仕事に還元でき、仕事をすることで活動が発展するという相乗効果を実感することが出来なかったと後に語っている。
- 6) ここでいう、「リンクする」とは、C氏がこれまで行って活動と現在、所属する団体の活動の在り方が一致する場合を指している。